

贈二十一回猛士在野山獄中 二十一回猛士の野山の獄中に在るに贈る

第一段

【原文・書き下し文】

1 君不聞輿地球周九萬里 君聞かずや輿地球にして周九万里なるを
2 航海諸蠻由一水 航海諸蠻一水に由る
3 大火輪船旋轉駛 大火の輪船旋轉して駛せ
4 輾波千里猶彈指 輾波千里猶お指を弾くがごとし
5 東海西洋無遠邇 東海西洋遠邇無く
6 通商拓土不窮已 通商土を拓いて窮まり已まず
7 我國神山環海峙 我が国神山にして環海に峙ち
8 絕壁暗礁天造壘 絶壁暗礁天造の壘
9 皇基頼固三千祀 皇基頼にして固きこと三千祀
10 未受外蠻凌辱恥 未だ受けず外蛮の凌辱の恥を
11 東海墨夷元蠢爾 東海の墨夷元蠢爾たりて
12 近請幕庭開互市 近ごろ幕庭に互市を開かんことを請う
13 千年綱紀一朝弛 千年の綱紀一朝にして弛み
14 遂割神州養犬豕 遂に神州を割きて犬豕を養う
15 豆州南港霜田涖 豆州南港霜田の涖
16 人禽雜糅相接趾 人禽雜糅して相い趾を接す
17 海内多難從此始 海内の多難此れ從り始まり
18 慷慨何人不切齒 慷慨何人か切齒せざらん

【詩型・押韻】

七言古詩(毎句押韻、一韻到底)。

『平水韻』

上声四紙(里・水・馳・指・邇・已・峙・壘・祀・恥・爾・市・弛・豕・涖・趾・始・齒・似・
己・彼・視・軌・觜・倚・蟻・起・矢・委・理・死・褫・矣・耳・美・梓・恃・徙・庫・螳・
枳・跬・脾・此・是・髓・擬・晷・累・技・抵・綺・紙・旨・宄・紀・紫・否・子・以・蒹・
俟・弭・止・兕・裏・使・靡・址・璽・秭・比・史・士・氏)、五尾(偉・葦)、八薺(體)、十
賄(罪・傀)通押。

【校勘】

・第9句「祀」を『清狂遺稿』『清狂詩鈔』ともに「紀」に作るが、第59句と韻字が重なり、『清狂吟稿』及び吉田松陰の次韻詩「第一段解題参照」に拠って改む。

【現代語訳】

野山獄のやまいくにいる二十一回猛士もうしに贈る

君は聞いたことがないのか、この世界は球の形で一周が九万里だということを、航海に出れば多くの蛮族ばんぞくらはひとつの海で繋がっている。

火をごおごと燃やした船が外輪がいりんを回して疾駆するが、

その波をきしらせて千里の果てまで進むのは指をはじくくらい一瞬の間。

東の海だろうと西の海だろうとお構いなく、

貿易だといって国土を広げては際限がない。

我が国は神の山で回りが海に囲まれた中に聳そびえ立っており、

険しい崖や海に隠れた岩は天が作りたもうた防塁ぼうれいなのだ。

天皇の御代みよは幸いにして三千年ものあいだその礎は堅固なもので、

外国の野蛮な輩やからから侮あなどりをうけることなどなかった。

海の東のアメリカという国はそもそも礼儀もわきまえず、

近ごろ幕府に貿易を始めたいなどと願い出にやってきた。

千年もの永きにわたって保たれてきた国の規律は一瞬ゆゑにして緩み、

かくしてこの神国の地を割譲して犬や豚のような輩やからを養うこととなった。

伊豆いずの南の港である下田しもたの浜は、

人間と禽獣きんじゆうが入り乱れてごったがえずという様相を呈ていしている。

世の中の多くの災難はここにはじまったのであり、

誰が憤いきどおりを発して齒はぎしりしないでいられようか。

【解題】

この詩は萩はぎ（山口県萩市）の野山獄のやまいくに繋がれていた吉田松陰（一八三〇―一八五九）を励ますために贈ったもの。安政元年（甲寅 一八五四）三月三日（旧暦）の日米和親条約締結後の三月二十七日夜、松陰は下田に停泊中のペリーの旗艦に金子重輔かねこしげのすけ（一八三一―一八五五）とともに乗り込んで海外への渡航を試みようとしたが拒まれたため、翌日、下田奉行所に自首し、四月十五日、伝馬町てんまの

獄に送られた。この密航に対して幕府の中には死罪まで求める者もいたが、九月十八日に国許に送られた。そして十月二十四日に野山獄に入れられ、次の年の十二月十五日には出獄する。この詩は『清狂吟稿』や『清狂遺稿』の制作年の明らかなこの前後の詩の並びから見ても、安政二年（乙卯 一八五五 三九歳）の作とみる。なおこの詩を贈られた松陰はこれに感激して、月性のもと全く同じ韻字を用いた次韻詩、「浮図師（僧侶）清狂、予に長篇を贈る有りて、毎句押韻し、凡て八十脚。称揚過当にして「過分なもので」、敢えて居る所に非ず。独だ其の語氣雄健にして、頑情（がんだ）を立つるに足る「怠惰な自分を奮い立たせるに十分であった」。予家に帰りてより来、例として世と通ぜざるも「世間と交りを絶つことを決めていたが」、此の詩を読むに及びて、黙々たること能わず「黙っていらなかった」。断然例を破りて、韻に仍りて「月性の韻字の通りに」和し答う。但だ才小にして力弱ければ、已だ其の長きに苦しみ、又た韻の窘しむ所と為りて、自ら醜穢（みずかしくうわい）なつともない内容」の紙に満つるを覚ゆ。然りと雖も上人の盛意（しやうじん）「月性の厚情」、吾其れ答えざるべけんや（浮圖師清狂、有贈予長篇、毎句押韻、凡八十脚。稱揚過當、非所敢居。獨其語氣雄健、足立頑情。予歸家來、例不與世通、及讀此詩、不能黙々。断然破例、仍韻和答。但才小力弱、已苦其長、又爲韻所窘、自覺醜穢滿紙。雖然上人之盛意、吾其可不答哉）」と題する詩（『松陰詩集』卷之上）で応じて、月性のその圧倒的な氣迫を讀んでいる。そもそも月性と松陰との関わりは、安政元年（嘉永七年 甲寅 一八五四 三八歳）十一月に月性が藩政改革の意見書として書いた「封事草稿」に対して、松陰がその翌年の三月九日に「浮屠清狂に与うる書（與浮屠清狂書）」（山口県教育会編『吉田松陰全集』第四卷所収 二〇〇一年マツノ書店という手紙を書き送ったあたりから直接の交渉が見られるが、これ以前に月性は萩に赴く際には杉家に泊まって、松陰の兄、杉梅太郎とはすでに交際が有ったし、この手紙にも「僕上人の名を歎むことここに十年、而して遂に相見るに因縁なし」と十年ほど前から月性の名は耳にしていたという。

全八十句のこの長編詩を内容によつて四段に分ける。第一段は永らく太平の世を享受してきた我が国が外国から屈辱的な通商を求められたことに憤る内容。

【語釈】

〇二十一回猛士 吉田松陰をいう。松陰はもと杉家の出で、その「杉」の字の木偏を分けると「十」と「八」になり、これに右の旁の「彡（さん）」を足すと「二十一」となるし、「吉田」の「吉」は「十一」と「口」、「田」は「口」と「十」に分けられ、それらを合わせるとまた「二十一回」になる。また松陰の通称は寅次郎で、虎（寅）の勇猛さにあやかっつて、「猛士」と称した（吉田松陰『留魂録』参照）。**野山獄** 長州藩では庶民などを収容する岩倉獄（萩市今古萩町）を下牢としたのに対し、そのすぐ西側の野山獄を上牢として士分の者を収容した。松陰とともに密航を企てた金子重輔は士分では

なかったので岩倉獄に入れられ、安政二年（一八五五）、一月十一日、獄死した。 1 君不聞 き
 っとみなも聞いたことがあるだろうと、この次に道理、常識、歴史的事実などを提示するため
 の常套語。「求菩提山の銅版妙法典の歌（求菩提山銅版妙法典歌）」（天保十三年 壬寅 一八四二二六
 歳）に「君聞かずや、西漢（前漢）の天子（武帝）の統御の年、漫に方士（仙術使い）をして神仙を
 求むしむるを（君不聞、西漢天子統御年、漫使方士求神仙）」 輿地 大地、世界。『周易』「説卦伝」には、
 「乾」を天と見なすのに対して、「坤を地と為し、母と為し……大輿（大きな車）と為す（坤爲地、爲母
 ……爲大輿）」といい、大地を万物を載せる大きな車に喩える。明の博物志『通雅』「天文」には、
 「地球、周九万里（地球周九萬里）」とあり、廣瀨旭莊（一八〇七―一八六三）の「玉壺主人を寿ぐ（壽玉壺
 主人）」詩（『梅墩詩鈔四編』卷三）にも空間と時間の広さについて、「輿地縦横九万里、支干（干支と
 同じで、時間をいう）上下二千年（輿地縦横九萬里、支干上下二千年）」という。なお中国の一里は時代
 によって異なるが明の時代で約五百六十メートルで日本の約四キロメートルより遥かに短い。
 ちなみに「輿地書」とは地理書のこと。 2 諸蠻 「蠻」はもと中国にとって南方に住む異民族を
 いうが、日本でも自国以外の民族の総称として蔑んで用いられる。月性は他の詩で「夷蠻」「百蠻」
 「蠻夷」、さらには「夷狄（夷は東方、狄は北方の異民族）」も同じように使っている。 一水 同じひ
 とつの海。 3 大火輪船 石炭を燃やし蒸気力で外輪を回して進む蒸気船。 旋轉 外輪が
 回転すること。 4 輶波 「輶」はもと挽き白をきしらせてぐるぐる回すことで、そのように外
 輪が回転して波を切って進むことをいう。 千里 実数ではなく、途方もなく長い距離をいう。
 彈指 指をはじくほんの短かな時間、一瞬。 5 東海西洋 東の海と西の海。 無遠邇 「邇」
 は近いという意で、遠いとか近いとか関係ない。 6 通商 国同士で貿易をする。 拓土 国
 土を切り拓く。晋（左思「呉都賦」）に呉の国が勢力を増し拡大していくことを描写する
 くだりに、「土を拓き疆を画し、卓犖として（ずば抜けているさま）兼ね并す（拓土、畫疆、卓犖兼并）」
 と。 7 神山 神々が住む山。漢（司馬遷『史記』「秦始皇本紀」）に「海中に三神山有りて、名づ
 けて曰く、蓬萊・方丈・瀛洲と（海中有三神山、名曰、蓬萊・方丈・瀛洲）」とあり、その神仙の住む
 山に始皇帝は徐福に命じて不老不死の薬を取りに行かせたというが、我が国ではそこが日本だ
 と信じられてきた。鷺津毅堂（二八二五―一八八二）の「海東唱酬集の序（海東唱酬集序）」に、「昔者、始
 皇仙丹（仙薬）を求むるに、所謂神山とは即ち是れ日本なり（昔者、始皇求仙丹、所謂神山、即是日
 本）」と。 環海 周囲が海。 峙 聳え立つ。 8 天造 天が造り出す。『周易』「屯」の彖辞に
 「天造草昧（天が万物を創造するそのはじめは混沌としている）（天造草昧）」と。 壘 防御のための建造
 物。 9 皇基 天皇の統治という大事業のその基礎となるもの。「皇」はもと中国の皇帝を指す
 が、ここは天皇の意味に転用する。後漢（班固「西都賦」）に「皇基を億載（十万年）」に図
 る（圖皇基於億載）。 頼 「頼る」という意味に採る訳書もあるが、ここは「幸いにして」という意

味に採る。「水母〔クラゲ〕六首」其六(『清狂遺稿』下)に、「一に今人の棄つるに任すも、古人頼に吾を容る〔受け容れる〕(二任今人棄、古人頼、容吾)」。三千祀「祀」は「年」に同じ。初代天皇の神武天皇の即位を元年とする皇紀によれば、この安政二年(乙卯一八五五)は皇紀二五一五年となり、「仙洞〔仙洞御所〕(仙洞)」詩(安政元年 甲寅一八五四三三八歳)では、「咄〔くそつ〕二千五百年の正統の真天皇を以て、一旦 将に犬羊〔外国〕に付せんとする〔明け渡す〕に忍びんや(咄以二千五百年正統眞天皇、一旦忍將付犬羊)」とほぼ正確に詠むが、ここは字数に制限があるためにその概数を挙げる。

10 外蠻 野蠻な外国の輩たち 凌辱 侮辱。 11 墨夷 アメリカ。月性は嘉永七年(安政元年 甲寅一八五四三三八歳)に作った「災異を紀す(紀災異)」詩(『清狂遺稿』下)の中では、アメリカを「亞墨夷」、「墨夷」と表記している。「夷」はもともと中国にとって東方の異民族を指していたが、方角に関わらず蔑んだ意味が込められている。 蠢爾 礼儀をわきまえず勝手に振る舞うこと。『詩経』「小雅」「采芣」に、「蠢爾たる蛮荊〔野蠻な荊州の者どもが〕、大邦〔周というこの大きな国〕に讎為す(蠢、爾蠻荊、大邦爲讎)」と。

12 幕庭 徳川幕府。第9句の「三千祀」語注に引用した「仙洞」詩に「語を寄せん〔言つてして申し上げたい〕幕庭の諸宰執〔重臣〕、王室を尊び奉りて辺防を警めよ(寄語幕庭諸宰執、奉尊王室警邊防)」。互市 お互いに物を売り買いすること、交易。 13 千年 第4句の「千里」と同じで、実数ではなく、長い間という意。 綱紀 国を治めるための要となる規律。「綱」は網をくくるための大づな、「紀」は小づな。『呂氏春秋』「用民」に、「民を用いるに紀有り綱有り。壹に其の紀を引けば〔一挙に紀を引っ張れば〕、万目皆起き〔すべての網目も開き〕、壹に其の綱を引けば、万目皆張る(用民有紀有綱、壹引其紀、萬目皆起、壹引其綱、萬目皆張)」。一朝 上の「千年」とは正反対で、一旦に同じく、あつという間。 14 神州 「州」は国で、日本を神々の宿る神聖なところとみなすことによる。月性はこのことばを詩の中で多用し、嘉永三年(庚戌一八五〇三四歳)の元旦に日食が起こったのを詠んだ「庚戌元旦、日に之を食する有り、感じて詠を成す(庚戌元旦、日有食之、感而成詠)」詩(月性展示館所蔵「庚戌未定稿」)にも、「維れ我が神州日本国、天日〔天照大神〕の子 降りて極を立つ〔天皇の位につく〕(維我神州日本国、天日之子降立極)」。犬豕 相手を蔑んで犬や豚の類いとみなす。『楚辞』「天問」に「舜〔古代の聖王〕厥の弟に服するも、終然として害を為す。何ぞ 肆にすること犬豕のごときなるも厥の身は危敗せざる〔弟が犬や豚の様に勝手気儘に振る舞っても舜は決して危い目に逢わなかったのはなぜか〕(舜服厥弟、終然爲害。何肆犬豕而厥身不危敗)」。 15 豆州 伊豆の国を中国風にこのように称す。 霜田 下田。日米和親条約によって開放された港町。 湊 岸边。 16 人禽 「人」は日本人、「禽」はアメリカ人で禽獣に喩える。「感有り(有感)」詩二首は日米和親条約締結の後に作られたものだが、其の二にも、「賈商〔外国の貿易商〕唯だ金銀の貴きを識るのみにして、禽獸 豈に君国〔日本〕の恩を知らんや(賈商唯識金銀貴、禽獸豈知君國恩)」と断ずる。また日米和親条約の第五条に下

田でのアメリカ人の行動範囲が七里以内と定められ、「無題（無題）」詩（安政二年 乙卯 一八五五年 三九歳『清狂遺稿』下）にも「七里の江山 犬羊に付す（七里江山付犬羊）」と詠む。 雜糅 入り乱れること。『漢書』「楚元王伝」に「今 賢不肖 渾殺し（入り混じる）、白黒 分かつたず、邪正雜糅す（今賢不肖渾殺、白黒不分、邪正雜糅）」と。 接趾 「接」はすぐ後に続くこと、「趾」はくるぶしから下の足で、人が歩いた後にすぐさま別の人の足がくることから人が異様に多いことをいう。 17 海内 この世の中、天下。 山縣有朋（一八三八―一九三三）の『清狂遺稿』の序文（明治二十四年 一八九八）にも「癸丑甲寅（一八五三・一八五四）の交、外舶出沒し、我が辺海は物情（世間の様子） 洶然（騒然）として、海内多事なり（癸丑甲寅之交、外舶出沒、我邊海物情洶然、海内多事）」と、このあたりの世情の不安であったことを述べている。 從 時間や場所の起点を示す助字。 18 慷慨 憤ること。 危難に際して悲憤慷慨することは士人たる者の挙措である。「久下玄機を輓む（輓久下玄機）」詩（嘉永七年 甲寅 一八五四年 三八歳『清狂遺稿』下）に、「丈夫（立派な男児。『清狂遺稿』は「大夫」に作るが、『清狂吟稿』に拠って改む） 慷慨 君を過憂し（人並み以上に主君のことを案じ）、病を成して遠游せんとして白雲に乗る（丈夫慷慨過憂君、成病遠游乘白雲）。 切齒 齒ぎしりして悔しがること。『史記』「刺客列伝」に、荊軻が秦の始皇帝暗殺の方法を樊於期に打ち明けた時、やはりその事に心を砕いていた彼は、「偏袒し（片肌を脱ぎ） 腕を捻みて進みて曰く、此れ臣の日夜切齒し腐心するものなり（樊於期偏袒搯腕而進曰、此臣之日夜切齒腐心也）」と。